

「新日本歌人」 utabito net短歌セミナー

2022. 4. 9・津田道明

第3回 歌のカタチ（その2）

- ・ 俊成 定家 建礼門院右京大夫
- ・ 民衆歌謡の成立－今様
- ・ 田楽と猿楽、武士と農民の成長
- ・ 『閑吟集』について
- ・ 「連歌」の誕生
- ・ 近世短歌における良寛の位置
- ・ 最後に

俊成 定家 建礼門院右京大夫

純化を遂げた『新古今和歌集』 『古今和歌集』から300年を経て、短歌形式に収斂。ただし、部立ては、『千載集』による。

こうした純化は、広範な歌人による勅撰集への並々ならぬ関心の集中を基礎としていた。

平忠度の都落ちと藤原俊成 『平家物語』から

建礼門院右京大夫と藤原定家 『建礼門院右京大夫集』から

忠度の状況認識と覚悟

この二、三年は、京都の騒ぎ、国々の乱れ、しかしながら当家の身の上のことに候ふ間、疎略を存ぜずといへども、常に参り寄ることも候はず。君すでに都を出でさせ給ひぬ。一門の運命はや尽き候ひぬ。撰集のあるべき由承り候ひしかば、生涯の面目に、一首なりとも、御恩をかうぶらうど存じて候ひしに、やがて世の乱れ出でて、その沙汰なく候ふ条、ただ一身の嘆きと存ずる候ふ。世静まり候ひなば、勅撰の御沙汰候はんずらん。これに候ふ巻き物のうちに、さりぬべきもの候はば、一首なりとも御恩をかうぶつて、草の陰にてもうれしと存じ候はば、遠き御守りでこそ候はんずれ。 (中略)

かかる忘れ形見を賜はりおき候ひぬる上は、ゆめゆめ疎略を存ずまじう候ふ。御疑ひあるべからず。さてもただ今の御渡りこそ、情けもすぐれて深う、あはれもことに思ひ知られて、感涙おさへがたう候へ。」とのたまへば、薩摩守喜んで、「今は西海の波の底に沈まば沈め、山野にかばねをさらさばさらせ。浮き世に思ひおくこと候はず。さらばいとま申して。」とて、馬にうち乗り甲の緒を締め、西をさいてぞ歩ませ給ふ。 (中略)

そののち、世静まつて『千載集』を撰ぜられけるに、忠度のありしありさま、言ひおきし言の葉、今さら思ひ出でてあはれなりければ、かの巻物のうちに、さりぬべき歌いくらもありけれども、勅勘の人なれば、名字をばあらはされず、「故郷の花」といふ題にて詠まれたりける歌一首ぞ、「よみ人知らず」と入れられける。

さざなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな　（千載集　66）

忠度の一首の底にあった思いは何か。

さざなみの志賀の大曲(おほわだ)淀むとも昔の人にまたも逢はめやも　（1-31）

近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのに古思ほゆ　（3-266）　柿本人麻呂

定家の場合

思ひやりのいみじうおぼえて、なほただ、へだてはてにし昔のことの忘れがたければ、「その世のままに」など申すとて、

言の葉のもし世に散らばしのばしき昔の名こそとめまほしけれ
かへし 民部卿

おなじくは心とめけるいにしへのその名をさらに世に残さなむ

(『建礼門院右京大夫集』岩波文庫、新潮日本古典文学集成)

定家が思いやったのはいかなることだったのだろうか。

民衆歌謡の成立－今様

和歌が、勅撰集において短歌形式に収斂する一方、同時並行的に「今様」が広がってゆく。いわば当時における現代歌謡の流行である。時の最高権力者、平清盛の前で祇王は歌う。その気迫、覚悟！

仏も昔は凡夫なり 我等も終には仏なり izzれも仏性具せる身と へだつるものこそかなしけれ

『梁塵秘抄』 232

続いて『梁塵秘抄』から、抄出してみよう。

我をたのめて来ぬ男 角三つ生いたる鬼になれ さて人に疎まれよ 霜雪霰降る水田の鳥となれ さて足冷かれ 池の浮草なりねかし と揺りかう揺り揺られ歩け (339)

美女打見れば 一本葛ともなりばやとぞ 思ふ本より末まで縊られればや 斬るとも刻むとも離れがたきはわが宿世 (342)

遊びをせんとや生まれけむ 戯(たはぶ)れせんとや生まれけん 遊ぶこどもの声きけば わが身さへこそゆるがるれ (359) (『梁塵秘抄』新潮日本古典集成)

田楽と猿楽、武士と農民の成長

『平家物語』巻1「願立」にみる「供養」の形 功德の変貌

時代の転換を支えた武士と農民の成長および在地における表現要求、芸能享受要求の高まり。

専門家集団の形成—田楽、猿楽と狂言、能、歌舞伎—

『閑吟集』について

室町時代における小歌をはじめとする歌謡の普及・成長 人々の時代感覚、時代認識7

嗟嘆之不足、詠歌之。詠歌之不足、不知手之舞足之踏之也。治世之音安以樂、其政和。乱世之音怨以怒、其政乖。正得失動天感鬼神、莫近於詩。詩者志之所之也。

（これを嗟嘆して足らざれば、これを詠歌す。これを詠歌して足らざれば、手の舞い足の踏まざるを知らざるなり。治世の音は安んじて以て楽しむは、その政和すればなり。乱世の音は怨みて以て怒るは、その政そむけばなり。得失を正し、天地を動かし、鬼神を感ぜしむるは、詩より近きはなし。詩は志の之くところなり）

（『閑吟集』真名序 二・岩波文庫『閑吟集』 p13 一部引用者修正。）

只吟可臥梅花月 成仏生天惣是虚

只吟ジテ臥スベシ梅花ノ月 成仏生天スベテ是レ虚 (9)

梅花は雨に 柳絮は風に 世はただ嘘に揉まるる (10)

なにせうぞ、くすんで 一期は夢よ、ただ狂へ (55)

ただ人は情けあれ 朝顔の花の上なる露の世に (96)

ただ人は情けあれ 夢の夢の夢の 昨日は今日の古(いにしえ)今日は明日の昔
(114)

閑話休題

映画『カサブランカ』から

"Where were you last night?"

"That's so long ago. I don't remember."

"Will I see you tonight?"

"I never make plans that far ahead."

「昨日の夜はどこにいたの？」

「そんな昔のことは覚えてない」

「今夜逢える？」

「そんな先のことは分からない」

「連歌」の誕生

『古事記』におけるヤマトタケル説話の中の、甲斐酒折の宮での老人とのやりとり、
〈新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる〉・〈かかなべて 夜には九夜 日には十を〉
は、「連歌」の起源と言って良いか？

佐保川の 水を堰き上げて 植ゑし田を 尼作る
刈れる初飯(はついひ)は ひとりなるべし

家持續ぐ

(『万葉集』 卷8 1635)

「連歌」の世界の特異性、特徴は何か。

文和千句第一百韻

新潮日本古典集成『連歌集』の冒頭を引いてみます。1355年4月、二条良基ら11人によって行われたもの。良基の初期の作品である。以下の「御」が二条良基

名は高く声はうへなしほととぎす

侍

しげる木ながら皆松の風

御

山陰は涼しき水の流れきて

文

月は峰こそはじめなりけれ

坂

秋の日の出でし雲まとみえつるに

素

(以下略)

近世短歌における良寛の位置

山住のあはれを誰に語らましあかざ籠(こ)に入れかへるゆふぐれ
あしひきの国(く)上(がみ)の山の山畑に蒔きし大根(おおね)ぞあさず食(を)せ君

秋の雨の日に日に降るにあしひきの山田の爺(をじ)は晩稻(おくて)刈るらむ

ここには、仏道の修行に終始しながら、その修行のうちに、農の仕事をも組み込んだような良寛の生活が歌われている。古代及び中世にあって、いかなる僧であっても、かかる生活様式を求道的進んだ人はいなかったのではないか。

このような求道者としての良寛の人間的資質が明らかになったのが、弟子貞心尼との交流だった。

たちかへりまたも訪ひこむたまほこの道のしば草たどりたどりに 貞心尼

かへし またも来よしばのいほりをいとはずばすすき尾花の露をわけわけ 良寛

秋萩の花咲く頃は来て見ませ命またくば共にかざさむ

秋萩の咲くを遠みと夏草の露をわけわけ訪ひし君はも

いついつと待ちにし人は来たりけりいまは相見て何か思はむ

(良寛歌は吉野秀雄『良寛』アートデイズ社2001年)

最後に

和歌が古代、中世、近世と続く千年以上の間、時代の影響をうけ、さまざまな変化を経てきたことを、それぞれの時代思潮を考えながら問題提起してきましたが、いかにも実作者の思い入れ、思い込みが激しい短歌史論でした。

近現代短歌史については、啄木特集や順三特集などもあってお互いに学びあう機会がありますが、古代から近世までの短歌史なると、いささか心もとない。そうしたことを考ながら、3回の講座を進めてきました。本当は「長歌」の問題や、コトバや韻律の問題など、踏み込んでみなければならない問題もまだまだ残されていますが、限られた回数ですから、短歌史やカタチの問題についての検討はここまでとし、次回は「歌の主題」、「テーマ」について検討してはどうか、と思っています。

皆様のご意見をお聞かせください。といってもそれに応えることができるかどうかわかりませんが。そのことを含んでいただいたうえで、よろしく申し上げます。